

それらは同じではない。

中野 聡

その日少年は、待ち合わせの時刻の二分前に、喫茶店の扉を開いた。からかると鳴るベルの音に少しだけ身を強張らせて、洒落たレジカウンターへ歩みを進める前に、店内をぐるりと見渡して目的の人物を探した。一度では見つからずに二度三度と見回していると、レジの店員や入口近くの席でホットコーヒーを飲む年配の女性客が怪訝そうに自分を見咎めたような、まるで自分が異質な存在であってこの空間には受け入れられていないかのような、そんな感覚を少年は覚えて、やや心地悪くなった。

少年がこの喫茶店へ入ったのは、人生で初めてのことだった。それまで彼にとってその店は住み慣れた街の風景の一部でしかなく、その場所を風景としてではなく場所として認識を直すこと自体が、例えば数学の応用問題を忘れかけの公式を使って解くような、そういう煩雑さのあることで、少年には精神力を要することであった。加えて、これは思春期を経験したことがあれば分かるかもしれない、中学生、あるいはその前後一年くらいの子にとって、食事や休憩をするために入る外の店といえ、同級生と放課後に連れ立って入るファストフードショップ、もしくは家族と休日の夜に車に乗って向かうファミリールストラン。喫茶店という場所は、そのキツサテンという言葉の響きもさることながら、ファストフードショップの油の匂いや若者のきんきんと張った声が入り混じって作り出す喧騒、ファミリールストランのドリンクバーの匂いや家族の声の賑やかさ、それ以外にもあるだろう軽率な馴染みややすさを持つ要素すべてが意志を持って排除され洗練されているために、未熟な子どもを寄せ付けない空気をたたえている。少年もその未熟な子どもの一人であって、必要がなければ立ち入ることもないだろう場所であった。

そんな場所に足を踏み入れた少年は不安、と言っても潜在的でかすかなものだが、それを財布を握りしめて誤魔化して、カウンターへと小さく駆けて丁寧にお辞儀をする店員と向き合った。マニュアル通り

の笑顔に沿った挨拶と季節限定メニューの案内を聞き終わるか終わらないうちに、メニューの一番上のアイスコーヒーの文字をたどたどしく指差しながら、これをひとつお願いします、と、裏声と掠れ声の混じった小さな声で、早口に注文をした。

少年の目的の人物は、入口やレジカウンター付近からはやや目につきにくいがおそらく店外から探せば見つけやすかったのだろう、窓の近くの二人席に、一人で、頬杖をつけて窓の方を向いてそこにいた。入り口側から見て後ろを向いて座っているその女性は、ページュのコートをもたれにかけていて、その目隠しによつて服装は見えないけど、耳に派手に大きなピアスが下がっていて、それをつけた黒のロングのストレートヘアアツてのが一番わかりやすい目印だから、と前もつて教えられていたから、それが自分の探していた人物だと少年は分かることができた。

少年がスマートフォンメッセージアプリから、今、着きました。もう、喫茶店の中にいます。と、メッセージを二つ送ると間もなく、その女性は自分のスマートフォンを確認したかと思うと座ったままぱつと振り向き、すぐに少年を見つけて、彼に向かつて小さく手を振った。少年はごく小さな会釈とこれもまたごく小さな手振りをして、女性の取つていた席へと近づいていった。

「ヒカリくんだよ、座って座って。」

ええと、と言葉を発しかけた少年を遮るように、女性はそう声をかけた。ヒカリと呼ばれた少年は、はい、とか、そうです、とか、そういう意味合いの曖昧な返事と、縦に一度振った首でその言葉を肯定してから言われた通りに女性の向かいの椅子に座った。女性の手元には、最後の方にあるメモ用の白紙のページが開かれた文庫本サイズのスケジュール帳と、すでにコップの半分ほどまで減ったストローの刺さったオレンジ色の飲み物が置かれていて、その取り合わせは少年にはなぜかとても不思議なものに思えた。

「オレンジジュース好きなんだ、私。ヒカリくんは、そうでもない？」

飲み物をまじまじと見つめていたヒカリに、女性が声をかけた。その視線はヒカリの手にするアイスコーヒーのカップに注がれていて、

その行動でヒカリは自分もまた相手の飲み物をまじまじと見ていたことに気付かされて、え、いや、そういうわけでも、だとかなんとか返事して視線を否応なく女性の目へ向けさせられて、それから申し訳なさそうに手元の自分のアイスコーヒーに目をやつて、ぎこちなくテールの自分側にそれを置いた。

「こんにちは。今日はよろしくね、ヒカリくん。」

ヒカリが女性の向かいの席に腰掛けて荷物を置き、女性はヒカリにそう言つて笑いかけた。笑いかけられたヒカリはまたそれに曖昧に、こんにちは、と返事して、続けてミライさんですよ、と、状況から分かりきつたことではあるが社交辞令をこなすように、確認の意を込めたイントネーションでそう尋ねて、女性はそれもまた笑顔で肯定した。

「うん。ミライです。はじめまして。」

今日はありがとうございます、それがヒカリのはつきりと伝えられた第一声だった。それは文字通りの感謝のお礼の意味よりも、今日のこの時まで文字だけでやり取りをしていただけの相手と初めて一対一で向き合つた状況で、当然生まれうるであろう気まずい沈黙が耐え難かつたから当たり障りのない一言を述べた、ただそれだけの第一声であつて、ミライはヒカリより大人であつたからそういう機微もわかつた上で、何も言わず社交辞令の笑顔を返すだけに終わつて、またすぐに沈黙は訪れるのであつた。

今日の待ち合わせに至るまで、ヒカリとミライがお互いを知ることになつたきつかけは仲立ちの人がいたからではあるが、さらにその元をたどればヒカリが相談相手が必要としていたからであつて、つまりこの席を設けたいと持ちかけたのはヒカリの方なのだった。そしてその用件について、ヒカリは概要をミライに伝えて、ミライもその相談を受けることにやぶさかではないとなり、一度実際に対面して直接話をしてみましよう、と、そういうわけでこの二人は今日に至つていたのであつた。

しかしそうして、ヒカリの抱えた問題の解決のために設けられた今日この場において、ヒカリのありがとうございますの一言から、ヒカリもミライも続く言葉を発さず、正確に言うならばヒカリの方は言葉

を発そうとはしているが発することができず、無言の時間が続いていた。しばらくして、ああ。えーと。その。えつと。自分が持ちかけた相談のその会話のつかかりを、溺れた海の中で浮かぼうとするようにヒカリはもがきながら探し始めたけれども、どこもない後ろめたさを伴うことを当たり障りなく話し出すというのは大人でないヒカリには難しく、結局はなにもつかむことができず、そしてまた無言に戻ってくるのだった。幸か不幸か、喫茶店という場所は何もしていない状態の人たちを歓迎する場所であり、その無言の時間が不自然なものとして周囲から浮いて目立つことはなかったが、それはヒカリにとって好ましいものということでは勿論なかった。

ヒカリは幾度となく、うつすらとはあるが、ミライさんの方から話し始めてくれればありがたいのに、と思い、それを期待するようにアイスコーヒーに口をつけながらミライへ視線を向けるのだが、ミライは視線に気づいたまま、ヒカリの口から相談なるものの詳細を語り出すのを、それが難しいということも織り込んだ上で、ただその時がやってくるのを待っていた。時折、オレンジジュースを飲むふりと、手元のスケジュール帳に何かを書き込む素振りをしてただ自分の様子を伺うミライを、ヒカリはその未熟さゆえに考え及ばず、ただ思い通りにならない歯がゆさを感じながら視線を向けたり外したりしていた。

そうして、時間は沈黙が支配したまま、彼の思うよりもずっと速く、砂時計の早回しのようにさらさら流れていつていた。

唐突に、ミライが立ち上がった。続けて、テーブルの上に広げていたスケジュール帳をたたんで革のバッグに仕舞い、背もたれのコートを腕に取って、その様子を座ったままただ見上げていたヒカリに視線を合わせるように少しだけかがんで、「ごめんね。仕事あるんだ、これから。」と告げた。

え、そうなんですか。ヒカリは答えた。ミライの視線はヒカリの背後を向いていて、そちらの方にヒカリが顔を向けると、壁には茶系統のデザインの店内によく馴染んだ針と目盛りだけで構成されたアナログ時計があつて、待ち合わせ時刻からちようど長針が一周回つていて、確かにミライは、その時刻までがリミットだということをヒカリ

に事前に伝えていた。

「相談、聞けなかつたね。ヒカリくんの。」

笑ってそう言ったミライに、あ、そ、そうですね。ごめんなさい。と、ヒカリは口ごもって、その様子を見てミライはまた笑った。

「だいたいの内容は知ってるんだけどね。詳しく聞けなかつた、っただけ。話しにくいよね、初対面の人に会ったばかりで直接、いきなり詳しいことを相談、なんてね。」

それはすべて事実であり、ミライはヒカリの相談ごとなるものの概要を事前に説明されていたけれど詳しく聞いていたわけではないし、その詳細というのはいつ一時間前に初めて顔を合わせた相手に饒舌に話せるようなことでもない。しかしミライのその言葉は、勇気を振り絞ろうとしながらも目的の達成すらできなかったヒカリをさらに落ちこませるには充分で、ヒカリの顔が見ても明らかかなほど曇ったので、ミライはヒカリの言葉の先回りをした。

「いいよ。また今度、いつがいい？」

口を開きかけていたヒカリは、え、と戸惑ったように声をこぼして、ミライを口の開いたまま見つめて、その様子に構わずミライはつらつらと喋り続けた。

「ヒカリくんが私に相談したいって言ってくれたんだから、ヒカリくんが、私に、きちんと相談できるまで、何度でも付き合うよ。ヒカリくんだったってちゃんと考えてくれた上で、私のことを危険な人じゃないって判断して、わざわざ連絡して、それで今日来てくれたんでしょ？　ね、連絡するから、また、よろしくね。これ、ヒカリくんのコーヒー代。じゃあねっ。」

最後の別れの一言の語尾は跳ねるような声で、くるりと身を翻してミライは伝票片手に立ち去った。喋りながらバッグから可愛らしいお財布を出して、取り出した五百円玉を一枚、問答無用で自分の手に握らせるミライの饒舌さとか強引さとか、もしかしたらそれらを総括して言える単語もあるのかもしれないが、とにかくそういうミライがヒカリに残していった印象は彼にとつて喫茶店と同じように経験したこととは今までなく、しかしそれとは違い息苦しさを感じないものであった。

一時間のあいだに、とうにコーヒの氷は溶けきっていてぬるく、

ミライとの別れの少し後にヒカリはそれをさつさと飲み干した。一時  
間滞在していても、今の彼は自分のいる場所をやはり居心地悪いと感  
じたからで、ただそれは自分が空間に受け入れられていないが故の居  
心地の悪さではないのだが、とりあえず自分は早くここを出るべきだ  
ろうと思い立ったのであった。握らされた硬貨を財布の小銭ポケット  
に入れてから、ヒカリは席を立ち喫茶店を出た。目の前の交差点を渡  
ると、その喫茶店はまたすぐ街の風景の一部に溶け込んだ。